子どもとおばけ

村田修子

夏が近づいてきますと、昔から怪談話に花が咲き、マスコミでもそれに類するものがとり上げられ、放送される落語や講談の演題にもにぎにぎしく登場してくるのが常です。

「それはおばけだ」
「手がないだろ」
「おばけは足がないよね」
「おばけ知っている。おばけやしきに入ったから」
「おばけみたらこっちに追いかけてきた」
「しっしっていったの」
「かえるがおばけ」
「へびがおばけ」
「コブラがおばけ」
「おうちにあるよ」
「いないよ、いないよ、ぼくんちにはいないよ」
「うちにはおばけいるよ、だってうちにこの本あるもの」
「田舎んとこにいるよ、倉庫に、夜出てくるんだよ。おとなが言っていた」
「〇〇ちゃん見たよ、白いんだ」

これは『ねない子だあれ』の本を私が持っているのを見た三

歳児の口から聞かれたことばです。そしてキャーキャー、ワイワイ、なかなかそのさわぎは治まらないで、それぞれがおばけをテーマに、今迄の自分の体験や誰かに聞いたこと、想像したことなどを発表してくれました。

おばけについては、こういうものという定義があるわけではありませんし、勿論誰も実際に見たというものではないのですから、どういうときに、どういうきっかけで関心を持つようになるのだろうかと考えてみましたが、どうも遊園地などに設営されている「おばけ屋敷」の経験が一番大きい影響力を持っているように思われます。勿論それ以前にも絵本で見ることがあったり、「舌切雀」などのお話の中にも出てきたりしていますので、それ等の経験が重なって次第に、こわいもの、気味の悪いもの、という観念が固定化していくのでしょう。

ちなみに、今私のそばにいる二歳半の孫は「おばけがこわい」とは言いません。彼が今一番こわいものは「狼」なのです。「三匹の子豚」たちを追いかける狼、次に聞いた話の中に出てくる赤ずきんをたべてしまう狼、狼の書かれている頁は早くめくってしまったり、おもちゃで遊びながらひとりで何か言っているのを耳をかたむけて聞くと「狼は木の陰にかくれて、じいっと子豚たちを見ています。」と本に書かれている通りにいっているのです。そして「狼こわいね」「狼くる？」というように、また、動物園に行っても「狼もいる？　豚もいる？」というように最大の関心事なのです。

その子はまだおばけということばも、どんなものらしい、ということも何も知りません。でも、電気のついていない暗いへやには一人では入って行きません。よちよち歩きの弟をさそって手をつないで一緒に行って自分の必要なおもちゃを持ってくるときがあります。全く知らないのですから「おばけが出るから」とはいいません。彼にとっては「狼がじっと木の陰でみているから」ということなのでしょう。このことからして、幼ない子の心の中にあるおばけと狼は、この段階では同じものであって、「おばけ」ということばをいろいろな形で知ることによって、多分狼はおばけにとって代られるだろうと思われます。

何をきっかけにして、いつ頃そう言い出すようになるか興味を持って見ている最中です。そしてそのとき多分弟の方はそれと同時におばけはこわいもの、というようになることだろうと思っています。

自分が小さかったときのことを振り返ってみますと、いつからこわく思ったかということは勿論定かではありませんが、田舎の道は狭くて暗かったので、夜親戚の家から帰るときなど、

母のたもとで顔をおおって、なお目をつむってねむって歩いている様子をよそおったりしました。暗やみがこわく、然もそこに何か（おばけ）を見たらなおこわいので目をつぶっていたに違いないのです。

それでも昼間はまわりが見えるのですから心強かったのでしょう。もう一つの経験として、おばけが出る、と噂の立った家に見に行ったことがあります。小さかったので、何故噂が立ったのかは知りませんでしたが、変った不幸があったのかも知れません。多勢の人が遠まきに集まっていて、玄関横のはき出しの小窓を指して、あそこからおばけが出るのだと教えてくれたので、立ったり、しゃがんだりして長い間じいっとその窓を見つめていましたが、一向に何のことはないので半分がっかりして家に帰りました。

今思えばそこの家の人たちはどんなにいやな思いをしたことかと同情の念でいっぱいですが、こわいもの見たさ、にかり立てられるのはいつのときも同じようです。

ですから園での今迄の経験からみると、子どもたちはそれぞれの年齢相応に興味や関心を示します。

三歳児の一月頃、女の子が突然「おばけ屋敷しよう」と言い出しました。聞くと、どこかの遊園地のそれに行ってきたというのです。けれどもこれは三歳児という年齢のせいもあって、周囲のひとたちが全然のっていかなかったので、その子の経験を聞くというだけで終ってしまいました。

今迄におばけをテーマにしてすばらしく盛り上った経験が二回あります。どちらも五歳児の組で展開しました。

おばけ屋敷ごっこ

このようなテーマは教師側の意図ではなく、子どもたちの話題が次第に盛り上り、それに教師も加わり手伝うという形で発展していきます。

或る日突然、「おばけ屋敷」の経験をしてきた子どもたちの話しが盛り上り、相談がまとまったらしく、自分たちでいろいろな材料を工夫して使って、三つ目小僧と、のっぺらぼうができ上りました。

子どもたちは作ることの次には、それよりもそれを使ってほかの人をおどろかしてやろうという気持の方が先行しますの

で、やや雑に作り上げたそれを持ってへやの中の人や庭で遊んでいる人にくっつけたり追いかけたりしています。最初は驚いた人たちも次第になれて驚かなくなります。

その結果、もっとたくさん作らなければ駄目らしいことが話し合われて、たくさん作ってへやの中をおばけ屋敷にしてみんなを呼ぼう、ということになり、目標がはっきりするとまた気分が盛り上って、次の朝、多くの人が、「これをやろうと思って張り切って来たな」、ということが分るような充実した顔で登園してきました。

でもその張り切った様子を見ていますと、一生懸命に作るひと、そのまわりにいて、わいわい言って張り切っているひと、「おばけ屋敷しますから見にきて下さい」、とまだ相談も何もできていないのに、浮き浮きした様子で何回もさそい掛けに出かけるひとありで、いろいろな張り切り方があるものなのだ、と改めて感心しました。

それをまとめる段階になると少数のプランナーが、ここに机を置いて、その下にもぐっていて出せばいいとか、ここは上からぶらさげて人が来たら紐をゆるめておろすとか、暗くしておいて懐中電燈で照らすとか、大きな段ボールの中をくぐって通るようにしておいてそこへ光るものをぶらさげたり、順路はこうで、こっち出口等々、他の子どもたちもそういわれることにすっかりのって協力している。何のことはない、いわゆる遊園地などでよく見掛けるおばけ屋敷もどきなのですが、子どもたちの生き生きとした顔付き、きびきびとした協力の仕方を見ていますと、子どもにとっては興味と関心のある活動に勝るものはない、ということを痛感させられたごっこでした。

小さい組の人たちにも参加してもらって大さわぎをしたあと、へやを片付けないまま全員が庭に出て行って活発に動き回っていたことも普段の様子とは全然違った現象なので、それも何か意味のあるひとこまだったように思っています。

また、このように突発的に盛り上ったことや、スリルを味わったり期待する類の事がらは余り長い準備期間があると、盛り上った気持が崩れてゆき易いように思われました。

ぼうずめくりならぬ、おばけめくり

お正月に、ぼうずめくりをした経験から、その遊びをしたいということになって、それがないために「作ったらいい」、ということになりました。

相談はまとまったものの、子どもの表現では普通の人とおぼ

うさんの区別がつけにくく、特に書いた本人は分っていても、多くの人と共通理解がされないと遊びがスムーズに流れない、という経験をへたあとで、たまたま一人の子の書いた絵が、おばけのようだったことから思いついて「おばけめくり」にしよう、ということになりました。

普通のカルタの四倍ぐらいの大きさの紙に人や花を組み合わせて書いたものと、自分たちが思いついたおばけの二種類を書こうということになりました。女の子は多く前者の絵を描き、男の子はおもしろがっていろいろのおばけを描きました。これも男の子と女の子の違いがよく分っておもしろいと思いました。

それができ上ってからは

・自分たちで作ったものであること

・遊び方が簡単で、知らなかったひとでもすぐ理解できること

・偶然が勝敗を左右するので、いわゆる強い者ばかりが勝つとはきまっていない、ことなどの理由で大変よく遊ばれました。

ときには帰る前にみんなが丸く腰掛けたまん中にカルタを置いてひとりずつびくびくしながらやって、わいわいと大さわぎをしました。

おばけの絵を描いてよかったことは、おばけというものには規定がないので、自分が思ったように創り出せることです。考えて描き足して、どんどんとこわい感じにしてゆくことができます。ですからいつもは余り好んで絵を描かなかったひとが何の抵抗もなく紙に向っていました。

その絵を紹介できたら、と思いましたが、自分で工夫して描いたり、たくさん遊んだものだったからでしょうか、それぞれが大事に持って帰ってしまいました。

矢張り気のはいったものは愛着もひとしお、ということなのでしょう。

楽しかった、おばけあそびのひとときでした。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）